

「# 大学生の日常」に埋め込まれた学習

コロナ禍は、日本の大学生に、とてつもないダメージをもたらした。キャンパスに足を運ぶことができなくなり、「大学生の日常」は失われた。では、「大学生の日常」とはいかなるものなのか。彼ら・彼女らは、何をし、何を得ていたのか。20代若手社会人=ビフォーコロナの大学生への調査を通して、その実態に迫った。

豊田 義博

コロナが奪った「大学生の日常」

日本にコロナが蔓延し始めた2020年2月27日、時の政権は全国の小・中・高等学校に「一斉休校」の要請を発令した。翌々4月7日には緊急事態宣言を首都圏などの地域に発令、16日には対象を全国へと拡大。これにより、全国の教育機関は5月末の宣言解除まで対面での授業を実施できない状況となった。そして、宣言解除後の6月以降、小・中・高校生の日常が取り戻されていく中で、取り残されたのが大学生であった。クラスター発生などのリスクを勘案した各大学の意思決定により、多くの大学生が、キャンパスに足を踏み入れることができない状況が続いたのだ。その状況がどの程度続いたのかは、地域の感染拡大動向や個々の大学の方針によって一様ではないが、ほぼすべての「大学生の日常」が大きく失われ、損なわれたことは間違いない。

その実情や学生たちの想いはソーシャルメディアによって浮き彫りにされた。そのシンボルであるハッシュタグ「# 大学生の日常も大事だ」には、彼ら彼女らの悲痛な声が今も続々と集まっている。以下の学生の呟きは、2020年度の大学生の状況を簡潔にかつ的確に表したものだ。

大学は現状でいいと思っているのか？ 家の中、た

った独りで授業に向かう事がどれだけ苦痛で不安か。一方的な映像視聴の後に出される沢山の課題。休学して最初からやり直したいと思わせるほど、学生は疲弊し、追い詰められている。

この状況は、今年度になっても本質的には変わっていない。以下のツイートは、2021年5月時点のものだ。

元々僕の通う大学はゼミ以外全てオンラインで受けさせられ、今までと同じ学費・施設費を払わされています。今回の緊急事態宣言を受け、唯一の対面のゼミもオンラインになりました。なんで教育機関が自粛しなきゃいけないの？ 夜に毎日の様に飲み歩く人がいるのに…。

ここで、改めて考えてみたい。「大学生の日常」とは何だろうか。大学生は、これまでどのような活動をし、どのようなことを学び、何を身につけてきたのだろうか。そして、今、失っているものは何なのだろうか。

いうまでもないが、大学の講義や演習を受講する、という活動がその中核にある。大学が提供するカリキュラムに沿って、必修科目や選択科目についての学びを深める活動だ。シラバスに沿って、教科書や配布資料をもとに、新たな知識や技術・技法を学ぶ時間、すなわち授業の時間であり、あるいはそれに関

連する自己学習の時間ということになる。2020年度当初はコロナ禍によってこの機会が消失していたが、いずれの大学においてもオンラインによる機会提供をほどなく開始した。大学生の日常の中核は確保されているかに見える。

しかし、現状には大きな欠落がある。だからこそ、これだけの批判的な声が上がったのだ。所轄官庁が対面授業の機会を確保するよという通達を出したのも、そうした社会からの要請を受けてのことだ。

その欠落は、前出の学生のコメントの中にある「たった独り」という言葉に集約されている。「たった独り」という状況が「苦痛」と「不安」を生み出しているのだ。

「苦痛」と「不安」の正体

学びの基本は観察である。「見よう見まね」で、人は何かを学んでいく。スポーツに取り組んだり言語を学んだりする上では、上級者の観察に勝る方法はない。視覚、聴覚など五感をフルに駆使して、人はスキルや知識を体得していく。

大学生の学びは、それには当たらない、と思われるかもしれない。形式化された知識をインプットし、何かをアウトプットする、という学習プロセスは観察とは無縁だ、と思われるかもしれない。

しかし、そうした知識のインプット以前に、その授業にどのような期待をし、どのような姿勢で臨むか、という態度の形成は、間違いなく観察によって促進される。同級生たちの様子を「感じる」ことによって。それは、授業が始まる前の様子かもしれないし、授業中の態度かもしれない。授業が終わった後に交わされている声などもあるだろう。

その授業に臨む態度のベースには、もちろん学生本人の興味・関心のレベルがある。しかし、そのレベルが同級生の中でいかにどのレベルなのか、自分より強く興味を持っている人が多いのか、それとも、みなあまり興味を持っていないのか、という状況が、観

察を通して本人の態度形成に強い影響を及ぼす。だから、観察によって学習態度は前向きにも後ろ向きにもなる。しかし、どちらになったとしても、学生本人の中から「苦痛」や「不安」は消失する。「こんな感じでやっていけばいいんだな」という心の安定がもたらされるからだ。

今、多くの学生に欠落しているもの。それは、この心の安定なのだと思う。学習態度が定まっていないということなのだと思う。リアルに学生が集まる場であれば、さほど意識もせずに、観察を通して形成されていくものが、宙ぶらりんのままになっている。その姿勢が定まらない中で次々と課題が出されていく。そして、課される課題の多くは、正解のないもの。さらに、その状況が1年以上続いているときている。これは「苦痛」だ。そして「不安」にもなる。

コロナ下でも生まれている「つながり」

だが、こうした「苦痛」や「不安」は、少人数でのゼミや演習科目ではあまり生じていないようだ。グループで課題に取り組んだり、授業中にもZoomのブレイクアウトルームなどの機能を活用して学生同志が対話したりする中で、学習態度が形成されていく様子がうかがえる。

昨秋、ある都内の大学の1年生にアンケートを取らせてもらった。全面オンライン授業を継続していた大学なので、多くの学生が閉塞感に苛まれている中でアンケートの依頼には躊躇いもあった。だが、結果は当方の想定をいい意味で裏切るものだった。

同じ大学の同級生の友達はできましたか？という問いにイエスと答えた学生は78%。フリーコメントには「オンライン授業であるにもかかわらず、話の合う友達が何人かできた」といった意見が散見された。オンライン環境でも、つながりは生まれているのだ。対面で実施していたときと比べれば、その広がりや深みには大きな差があるのかもしれないが、ともに学

んでいるコミュニティは形成されているし、またそのつながりがもたらす力は大きいといえそうだ。

つながりは、学生同志に限ったことではない。先のアンケート結果では、教員とのつながりができたと回答する学生は32%。コメントを見ると、つながりは初年次ゼミの担当教員だけにとどまらない。教員に関するコメントも思いのほか多かった。以下はその一例だ。

『大学の先生は基本放任主義』といったイメージがあったのですが、先生に質問したり、課題を提出した際にも、こまめにチェックして連絡を下さって、それがとても驚きましたし、嬉しかったです。

そのつながりは、授業の場に限らない。先のアンケートでクラブやサークルに入っていると回答した学生は38%。学外の趣味・スポーツ系のコミュニティに入った人は19%。アルバイトを始めた人は62%。ある学生団体に加入した学生は、こんなコメントを記してくれた。

コロナでできることががらりと変わって色々組織内で混乱はあった。しかし、そこではすべての先輩方が熱心に私たち新入生のために時間と労力を使ってくれ、私を成長させる場にしてくれた。ぜひ私も、来年後輩を迎えたら、彼らのように温かくサポートしたいと思った。大学には通えていないが、こうして人とつながりを持てる場に入れてよかったと思っている。

―大学のデータをすべての状況にあてはめることはもちろんできないが、コロナ下においても、様々なつながりが生まれていることは間違いないだろう。

「マルチリレーション社会」の到来

「大学生の日常」とは、つまりは、このような様々なつながりそのもの、なのではないだろうか。その中核は、大学から提供される様々な学習機会を通じた経

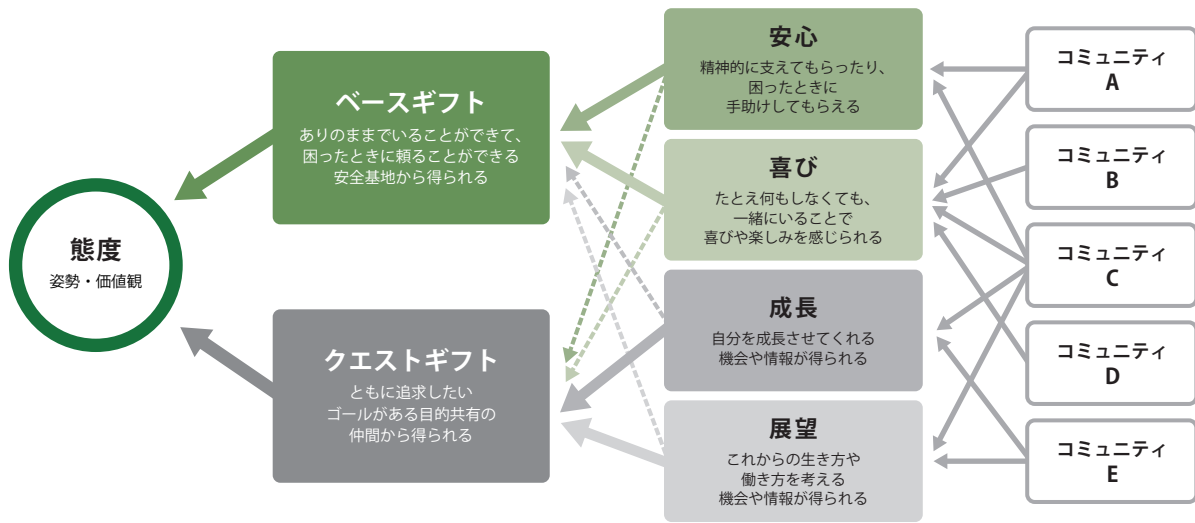
験・学習を指すのだろうが、その経験・学習には、学生同志のつながりや教員とのインタラクションが欠かせない。そして、経験・学習の機会は授業の場に限らない。サークルもバイトも、友達づきあいも。大学生である期間に、様々なコミュニティに参加し、様々なつながりを通して何かを獲得していく。それが「大学生の日常」なのだ。

中学でも高校でも、いくつかのコミュニティには所属していた。クラスメイトはいたし、部活もやっていた。しかし、大学生になると、授業ごとにその顔触れは異なるし、コミュニティの選択の幅も劇的に広がる。主体的にコミュニティを選択し、つながりをつくっていくことが求められる。そして、選択したコミュニティや得られたつながりを通して、自分というものを創り上げていく。つながりなしには、自己を創り上げていくことはできない、と言い換えてもいい。そして、つながりの重要性は大きく増している。

リクルートワークス研究所は、つながりの価値がこれまで以上に高まり、その多様性や関係性の質が重視される時代の到来を予見し、来るべき社会を「マルチリレーション社会」と名付けている。その提言書^{*1}では、幸福感と人とのつながりは密接な関係があること、つながりの質と多様性が重要なことが謳われ、日本社会は他国に比べてつながりが職場と家族に集中し、かつそのつながりが希薄化していることが指摘されている。

また、人とのつながりには、安全基地としてのベース性、目的共有の仲間としてのクエスト性という2つの性質があり、ベース・リレーション、クエスト・リレーション双方を持つことで、キャリアの見通しが高まるという構図を大規模調査の結果を踏まえて提示している。そして、その背景には、つながりを通じて、人生やキャリアを豊かにする「安心」「喜び」「成長」「展望」というギフトを受け取っていること、対話を通じた新たな気づきや価値観の創造が生まれていることが指摘されている。

図表① 「大学生の日常」に埋め込まれた学習モデル



ビフォーコロナの「大学生の日常」を探索する

社会へと飛び立つスタート地点とも呼べる大学生活において、様々なコミュニティに参加し、ベース・リレーション、クエスト・リレーションを獲得すること。そして「安心」「喜び」「成長」「展望」というギフトを受け取ること。これが「大学生の日常」だ。そして、そのギフトが、生きていく上でのものの考え方やことへの対し方、つまりは姿勢や価値観＝態度を創り上げていく。「大学生の日常」とは、大学生一人ひとりの未来に大きく影響を与える経験資産なのだ。

こうした視界と問題意識のもとに、「大学生の日常」には、どのような学習が埋め込まれていたのかを明らかにしていく研究を実施した。大学において人文・社会科学を専攻した20代社会人への定量調査^{*2}、インタビュー調査を通して、ビフォーコロナのキャンパスライフを浮き彫りにした。

調査においては、大学生活を「いくつものコミュニティに属し、コミュニティでの活動、人とのつながりを通して様々な経験・学習を獲得する期間」と定義した。そして、その第一の成果として、それぞれのコミュニティからどの程度のベース・リレーション、クエスト・

リレーションを得たのか、ギフト(安心、喜び、成長、展望)をいかに獲得できたか、と定義した。また、ベース・リレーションからは主に「安心」「喜び」を、クエスト・リレーションからは主に「成長」「展望」を受け取ると置き、「安心」「喜び」をベースギフト、「成長」「展望」をクエストギフトと呼ぶこととした(図表①)。

最もかかわりの深かったコミュニティは？

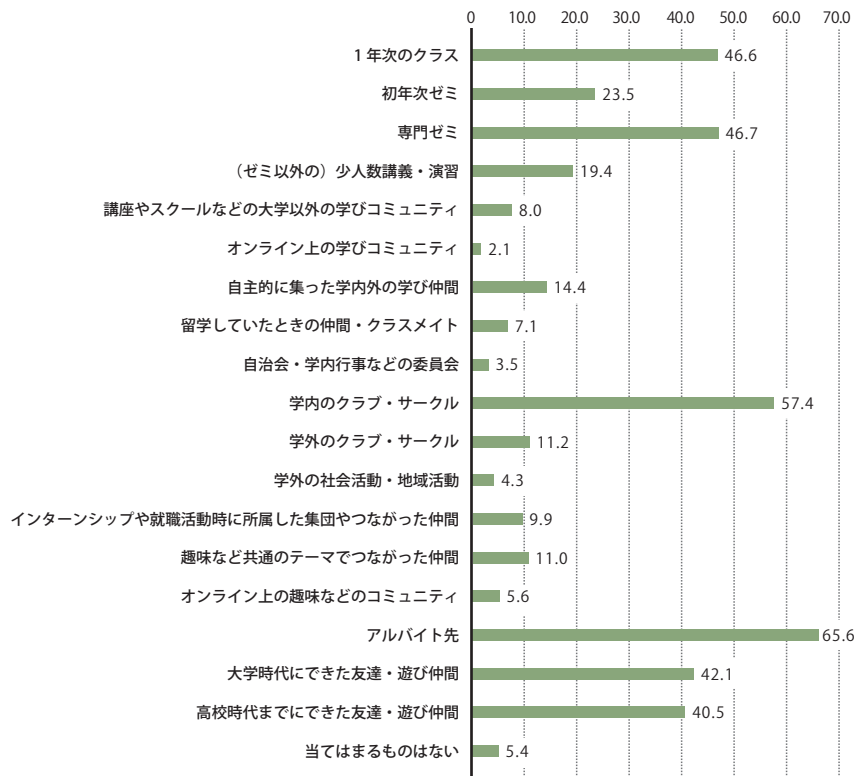
まずは、定量調査の結果を概観しよう。彼ら・彼女らは、どのようなコミュニティに参加していたのか。専門ゼミなどの学びコミュニティ、学内外のクラブ・サークルなどのテーマコミュニティ、働く場としてのバイトコミュニティ、友達コミュニティを分類した18項目を提示し、在学中の所属状況を尋ねた(図表②)。

所属率が最も高かったのは「アルバイト先」(65.6%)、次いで「学内のクラブ・サークル」(57.4%)。

*1 リクルートワークス研究所(2020)「マルチリレーション社会—多様なつながりを尊重し、関係性の質を重視する社会—」

*2 ①調査対象：大学(人文・社会科学系学部)を卒業し、現在三大都市圏で働いている25~29歳の男女1000名 ②調査方法：インターネットモニター調査 ③調査内容：現在の就業実態、大学時代に所属していた集団(コミュニティ)での活動状況など ④調査時期：2021年1月

図表② 大学時代に所属していたコミュニティ



図表③ 大学時代にかかわりの深かったコミュニティ

	トップ	セカンド	サード
1年次のクラス	9.6%	10.0%	9.3%
初年次ゼミ	1.8%	5.5%	3.5%
専門ゼミ	13.0%	16.5%	16.6%
(ゼミ以外の) 少人数講義・演習	1.0%	0.8%	0.6%
講座やスクールなどの大学以外の学びコミュニティ	0.2%	0.2%	0.9%
オンライン上の学びコミュニティ	0.0%	0.3%	0.0%
自主的に集った学内外の学び仲間	0.7%	0.5%	0.6%
留学していたときの仲間・クラスメイト	1.3%	2.1%	2.0%
自治会・学内行事などの委員会	1.3%	0.3%	0.3%
学内のクラブ・サークル	29.5%	11.8%	7.3%
学外のクラブ・サークル	3.7%	2.4%	2.0%
学外の社会活動・地域活動	0.3%	0.2%	0.0%
インターンシップや就職活動時に所属した集団やつながった仲間	1.2%	1.7%	2.0%
趣味など共通のテーマでつながった仲間	1.6%	1.8%	1.2%
オンライン上の趣味などのコミュニティ	0.4%	0.5%	1.2%
アルバイト先	12.6%	20.8%	21.6%
大学時代にできた友達・遊び仲間	14.5%	14.4%	11.7%
高校時代までにできた友達・遊び仲間	7.4%	10.5%	19.2%
N 数	946	660	343

過半には届いていないが「専門ゼミ」「1年次のクラス」「大学時代にできた友達・遊び仲間」「高校時代までにできた友達・遊び仲間」の4つが40%を超えている。それらから数字の開きはあるが「初年次ゼミ」「(ゼミ以外の) 少人数講義・演習」「自主的に集った学内外の学び仲間」が続いている。

調査では、所属していると回答したコミュニティの

中で「最もかかわりの深かったコミュニティ(以下トップコミュニティ)」「二番目にかかわりの深かったコミュニティ(以下セカンドコミュニティ)」「三番目にかかわりの深かったコミュニティ(以下サードコミュニティ)」を尋ねている。物理的な時間ではなく、気持ちの上で大学時代を代表するコミュニティを回答してもらった。結果は図表③の通りだ。

トップコミュニティの最上位は「学内のクラブ・サークル」が29.5%と他を大きく引き離している。3割弱の人が、キャンパスライフという、何とんでもクラブ・サークルだった、と回想している。それがセカンドコミュニティ、サードコミュニティになると、サークルの存在感は大きく低落する。代わって台頭するのは「アルバイト先」。いずれも20%を超えている。一にサークル、二にバイト、という「学び」なきキャンパスライフが代表的なものだ、ということか。

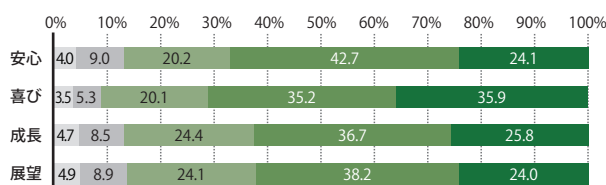
サークルとバイト。この2つの存在感が大きいことは調査以前から予測されたことだが、それに続いている存在が「専門ゼミ」だ。トップ、セカンド、サードともに10% 台中盤のシェアを占めている。専門ゼミが必修となっている大学も多く、2年間ないしはそれより長い期間所属することもあり、人文・社会科学系の学生にとっては、やはり大きな存在感を放っている。同程度の存在感を示しているのは「大学時代にできた友達・遊び仲間」。そして「1年次のクラス」も、3つのいずれにおいても10% 前後のシェアを占める。「高校時代までにできた友達・遊び仲間」は、トップコミュニティでの存在感はさほどでもないが、セカンド、サードとその存在感を増す。

職場に比べて極めて高い ベースギフト、クエストギフト

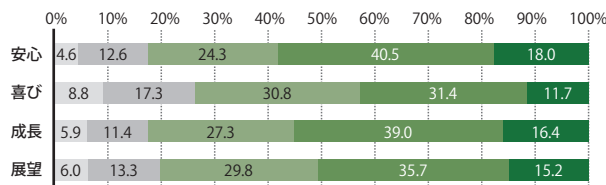
では、彼ら彼女らは、深くかかわったコミュニティから、いかにギフトを獲得していたのか。トップコミュニティでの「安心」「喜び」「成長」「展望」の獲得状況は図表④の通りだ。

いずれも高い獲得状況になっている。「とても当てはまる」に限定しても、安心 (24.1%)、喜び (35.9%)、成長 (25.8%)、展望 (24.0%) という高水準だ。特に高いのは「喜び」である。「たとえ何もしなくても、一緒にいることで喜びや楽しみを感じられる」というギフトは、心を許せる仲間とのつながりが

図表④ コミュニティから得られたギフト (トップコミュニティ)



図表⑤ 現在の職場から得ているギフト



まったく当てはまらない あまり当てはまらない どちらともいえない
 やや当てはまる とても当てはまる

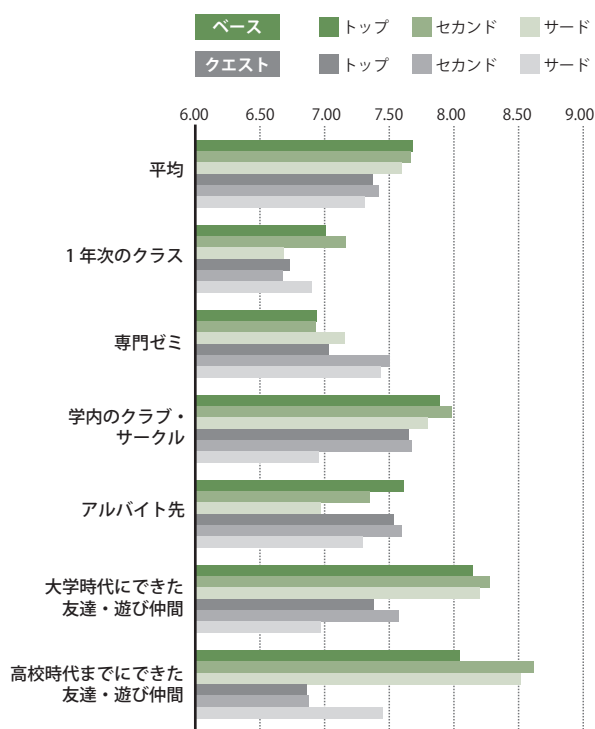
あつて初めて得られるものだ。他のギフトも、4人に1人が「とても当てはまる」と回答しているのは十分に高い数字だといえる。

数字の高さは、彼ら彼女らが、現在働いている職場から得ているギフトとの比較から、より明らかになる(図表⑤)。数字の上で顕著な差が生まれているのは、やはり「喜び」だ。「とても当てはまる」を見ると、大学時代のトップコミュニティとは24.2ポイントもの差がある。大学時代のコミュニティの方が、はるかに「ありのままにいられる」のだ。だが、高いのはベースギフトだけではない。「成長」「展望」のクエストギフトにおいても、「とても当てはまる」のスコアは、大学時代のトップコミュニティの方が10ポイント近く高くなっている。

コミュニティの種類、 構成員によってスコアはどう変わる？

ここからは、「安心」「喜び」の回答結果の合計得点をベースギフトスコア(以下ベーススコア)、「成長」「展望」の回答結果の合計得点をクエストギフトスコア(以下クエストスコア)とし、様々な対象とそのスコアとのクロス分析データを見ながら話を進めていきたい。

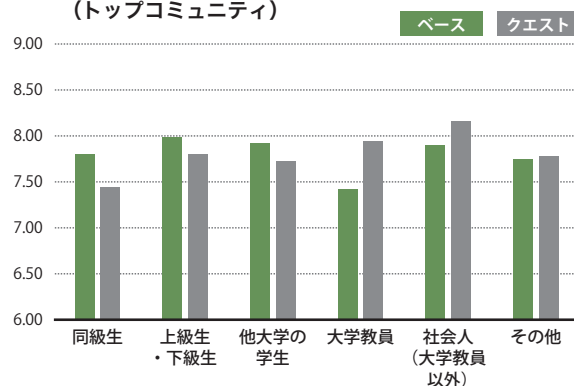
図表⑥ コミュニティ別のギフト（ベース・クエスト）



コミュニティの種別によって、得られるギフトにはどのような違いがあるのだろうか。かかわりが深いと回答した比率が高い6コミュニティに絞ってその違いを算出すると、「学内のクラブ・サークル」「大学時代にできた友達・遊び仲間」「高校時代までにできた友達・遊び仲間」からは、やはりベーススコアを高く得ているという傾向がはっきりと見て取れる(図表⑥)。クエストスコアは、「学内のクラブ・サークル」「アルバイト先」「大学時代にできた友達・遊び仲間」が同レベルで並ぶが、「専門ゼミ」も健闘している。しかし、その差はベーススコアに比べれば小さく、コミュニティ別に大きな差は見られない。

次に、コミュニティの構成メンバーに注目しよう(図表⑦)。コミュニティにどのような人がいるか、によって違いが見られる。大半のコミュニティには同級生がいるので、その数字を平均と置けば、上級生・下級生や他大学の学生がいると、ベーススコアは高まる傾向にある。大学教員以外の社会人がいる場合も同様だ。クエストスコアを見ると、社会人や大学教員がいると、

図表⑦ コミュニティ構成員とギフトの関係 (トップコミュニティ)



高まる傾向にあるが、上級生・下級生や他大学の学生の存在も、押し上げる効果がある。同級生だけではなく、コミュニティに多様性がある方が、ベーススコア、クエストスコアともに高まるといういいだろう。

コミュニティ選択視点の重要性

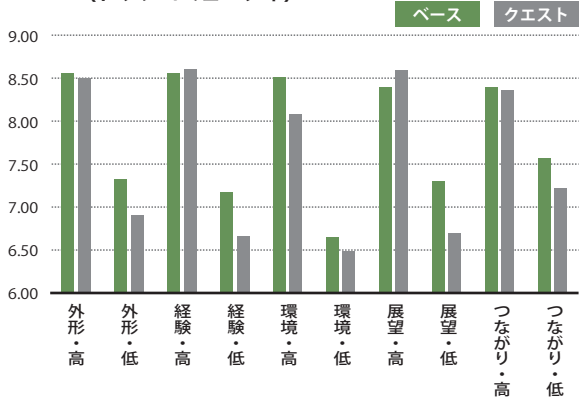
ここからは、コミュニティと本人の意識や行動、経験との関係を見ていこう。コミュニティのベース性、クエスト性には一定の傾向があるが、すべての構成員が同等のギフトを獲得するというわけではない。参加者がその場にどのような姿勢で臨んだのか、どのような役割を果たしたのか、そしてどのような経験をしたのかによって、得られるギフトは変わるはずだ。

まずは、コミュニティ選択視点から見てみよう。どのような動機で、あるいはどのようなきっかけでそのコミュニティに所属するに至ったのかは、人それぞれだ。コミュニティ選択の際に、「外形」「経験」「環境」「展望」「つながり」のうちどのような視点を重視したかについて、尋ねている^{*3}。そして、その回答結果を、それぞれの視点を「重視した」「重視しなかった」に二分し、ギフトの獲得状況を概観した(図表⑧)。

分析結果から見えてくるのは、いずれの視点を問わず、コミュニティ選択において意図や意思を明確に持っていた人は多くのギフトを獲得しているが、さほど深い動機や目的を持たずにコミュニティを選んだ人が得ているギフトは少ない、という顕著な傾向だ。

近年の大学生活は、授業への一定回数以上の参加を単位取得の要件とする傾向の高まりにより、時間的制約はかつての大学生より増してはいるが、それでもなお、選択の自由度は高校生までに比べて、そして社会に出て以降に比べてもはるかに高い。しかし、一方で大学

図表⑧ コミュニティ選択視点とギフトの関係 (トップコミュニティ)

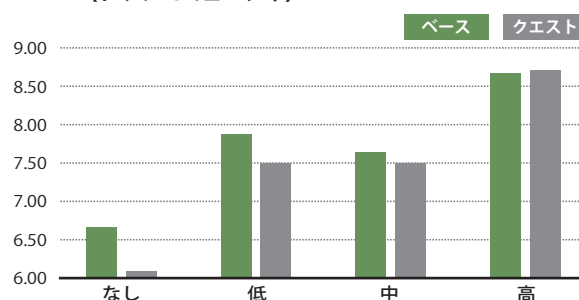


生活が画一化しているのも事実だ。サークルに入り、バイトして、友達つくって、コスパのいい授業を選んで単位を楽に取って……という不文律のような世界が、大学生の在りようを規定している。結果として、サークルに入ること、アルバイトをすることが「目的化」する。「みんながやっているし、大学生活ってそういうもんだし」という動機なき参加が生まれる。こうして、コミュニティに参加してはいるが、豊かなギフトを得られていない、という大学生が増えているようにも感じる。権利として獲得している自由を持て余しているとすれば、「大学生の日常」は実りのない時間になってしまう。このデータからは、大学生活をどのようなものにしたいか、というビジョンを、学生一人ひとりが抱いていることの大きさが改めて確認できる。

コミュニティで果たした役割がギフトを高める

所属したコミュニティで果たした役割とギフトの関係はどうだろうか。本リサーチでは7つの役割(オーナー、リーダー、マネジャー、ティーチャー、フロント

図表⑨ コミュニティで担った役割とギフトの関係 (トップコミュニティ)



ランナー、アドバイザー、サポーター)について、明示的な役割、自発的な行動の別を問わず、自身がそのコミュニティにおいて果たした度合いを三段階で尋ね、果たした役割をスコア化した。回答傾向を見ると、半分以上の役割をしっかりと果たしていたと回答する「役割高群」が2割いる一方で、参加はしていたものの、上記の役割をまったく担っていなかったと回答する「役割なし群」も2割存在していた。そして結果は明白なものであった。役割高群が得ているギフトは顕著に高く、役割なし群が得ているギフトは明確に少ないのだ(図表⑨)。

役割とは、誰かから賦与されるものではない。コミュニティの状況を見て、自らが果たせる、果たしたい、果たすべき役割を見出し、その役割を主体的に果たしていくものだ。指名される、選挙で選ばれるという役割もちろんあるが、基本となるのは状況対応的なものだ。リーダーシップはAppointed Leadership、Elected Leadership、Emergent Leadershipに区分されるという研究があるが*4、この考え方はリーダー以外のすべての役割にも応用されるものだ。自らが役割を買って出るという行為は、主体的にコミュニティとかわろうとする態度が形成されていると見ることもできる。もちろん、与えられた役割にも価値はある。役割を得

*3 外形：興味・関心の持てるテーマか、学生間の評判・人気はどうか／経験：どのような経験ができるのか／環境：そのコミュニティが自身にとって快適かどうか／展望：そのコミュニティへの所属を通して自身がどうなりたいか、何を得たいか／つながり：他者からの推薦や勧誘

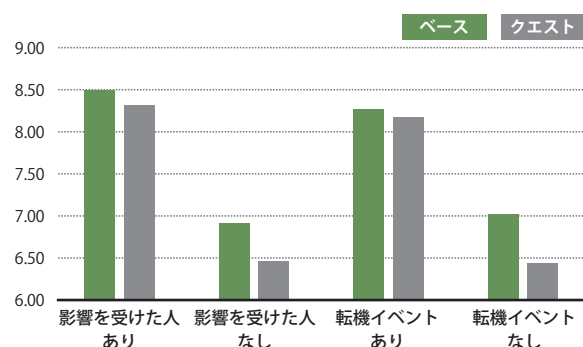
*4 House, Robert J. and Mary L. Baetz, 1979, "Leadership: some empirical generalizations and new research directions," B. M. Staw ed., Research in Organizational Behavior 1, Greenwich, JAI Press, 341-423.

ることにより、コミュニティに向き合う姿勢が変わることもまた大きく期待できる。いずれにしても、役割という観点からは、コミュニティで得られるギフトを高める上で極めて重要なものだ。

影響を受けた人、 転機イベントが態度形成をもたらす

コミュニティへの所属によって、人には何らかの変化が表れる。コミュニティを構成している他者との対話、相互作用を通じて、人は何らかの影響を受ける。多くの場合は無自覚に。しかし、特定の人に大きく影響されることもある。また、そのような他者との相互作用を中心とした経験を通して、ものの考え方やことへの接し方が変容することもある。新たな態度(姿勢・価値観)が形成されたり、その人にとっての転機となるイベントが発生したりすることもある。そのような人物がいたか、そのような転機イベントがあったかについても、今回の調査では尋ねている。影響を受けた人がいたと答えた人は、トップコミュニティでは49.4%、セカンドでは34.1%、サードでは33.2%。転機イベントがあったと答えた人は、トップ54.3%、セカンド35.6%、サード32.9%。トップコミュニティは、その人の態度形成に大きなインパクトを及ぼす場だということが改めて確認される。そして、影響を受けた人や転機イベントの有無とギフトとの間には、当然のように明確な関係がある(図表⑩)。

図表⑩ 影響を受けた人・転機イベントとギフトの関係
(トップコミュニティ)



ギフトをもたらす3つの態度形成

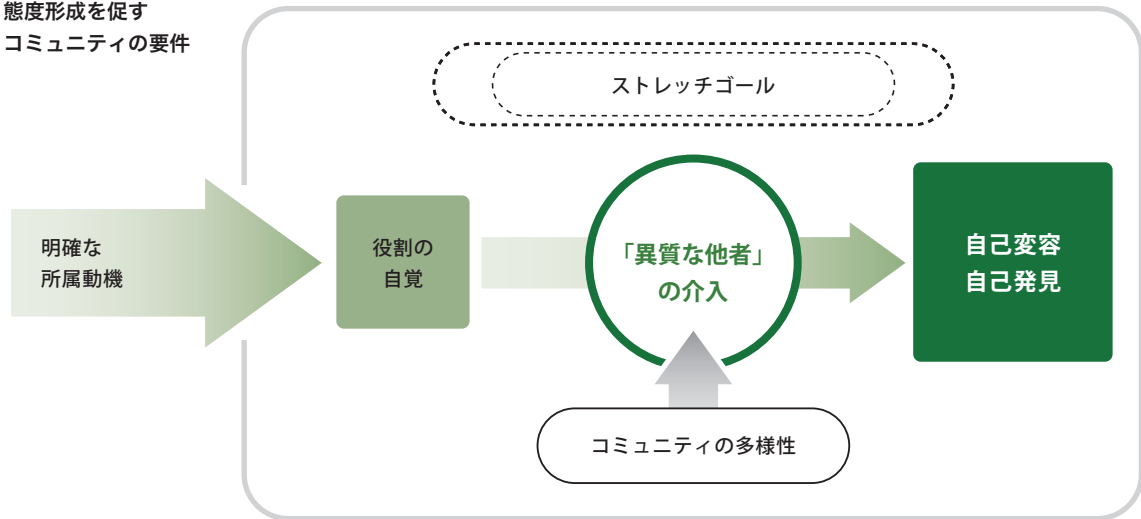
ここまで、コミュニティから得られるギフトと様々な対象との関係を見てきた。では、得られたギフトは、どのような態度(姿勢・価値観)の形成につながっているのだろうか。定量調査の回答者の中から、トップコミュニティにおいてベースギフト、クエストギフトを高く獲得していた人を対象に行ったインタビュー調査^{*5}からは、3つの観点が浮かび上がった。

1つめは、「人との交わり方」だ。その背景には、高校までとは異なる環境に身を置いていたことがある。多くのインタビューが、大学時代のコミュニティ活動の中で「多様な考え方、スタイルの人がいる」ことを痛切に感じたと語ってくれた。多様な地域から、多様な考え方を持った人が集まる大学のキャンパスは、高校までとはまったく異なる人間集団の場だったと捉えていた。そして、そのような多様な人々と、何かを共同でなしていく(それも、教師や親などの監督下ではなく、学生だけで)中で、どのように人と接し、かわり、分かり合えばいいかを学んでいた。それは、スキルや知識のようなものではなく、人間というものの基本認識、人と交わるという上での基本姿勢といった態度的なものだ。

2つめは、「ものの考え方・ことへの接し方」だ。多くの場合、それは、他者の言動による気づきから形成される。将来を真剣に考えている同級生、高い洞察力を持ち鋭い指摘をする先輩学生、地域の人たちと真摯に接している経営者などと交わる中で、「自分もそうありたい」「自分をもっと変わらなければ」という想いを強くし、それによってももの考え方・ことへの接し方が大きく変わる。ひとこと言えば、主体的になるのだ。

上記2つは、自己の変容と捉えられるが、3つめは、少し異なる。「自己発見」だ。人とのつながりや様々な経験を通して、自分の志向や適性に目覚めるのだ。高校までは気づいていなかったり、大学時代の経験

図表① 態度形成を促す
コミュニティの要件



を通して、自身の特徴がより強くなっていったりなど、そのプロセスは一様ではないが、この自覚はつまりはアイデンティティの確立だ。必然的に、進路選択においては、その志向・適性を活かした道を考えるようになる。こうした人は、就活での自己分析をわざわざしたりはしない。

態度形成を促すコミュニティの要件

こうした態度形成につながるコミュニティの要件を、ここまでの分析をもとに整理したのが図表①だ。

個人視点からは、所属にあたっては明確な所属動機を持ち、主体的に役割を自覚することが挙げられる。コミュニティ視点からは、志向や価値観の異なる人たちが集まっているようなコミュニティの多様性があること、そして、コミュニティとして目指すことが、所属メンバーそれぞれにとって大きな背伸びが必要なストレッチフルなものであること。この要件が整うと、個人が役割を実行に移す中で、異なる価値観を持った「異質な他者」が立ち現れ、何らかの介入がなされる。ロールモデルとして、あるいは師として、ともに試行錯誤を重ねる仲間としてなど、「異質な他者」の役回りは様々だが、その存在や関与が本人に強烈な内省を促す。大人になるための通過儀礼とでもいえ

ばいいだろうか。それが、自己変容や自己発見をもたらすという構図だ。

実は、インタビュー分析は現在進行中である。ここまで説明してきたモデルは、この原稿が世に出るころには進化しているかもしれない。現時点では理想的なモデルだが、実践につながるものへと進化させていきたいと思っている。そのときには、このモデルを、ウイズコロナ・アフターコロナの環境下でどのように実現するか、ビフォーコロナの「大学生の日常」を、どのように再創造するかというところまで発展させていきたいと考えている。

*5 ◎調査対象：先行して実施した定量調査の回答者の中から、以下の要件を満たす人を抽出した。

- ・かかわりの深かったコミュニティを2つないしは3つ回答している人
- ・最もかかわりが深かったコミュニティで、高いベースギフト、クエストギフトを得ていたと回答している人
- ・インタビュー設定期間内に、Zoomによる90分のオンラインインタビューに応じることが可能な人

◎上記を対象に、以下の条件を満たす形で20名をリクルーティングした。

- ・男女同数
- ・大学タイプ(入学偏差値「65以上」「55～65未満」「55未満」)をバランスよく均等に
- ・かかわりの深かったコミュニティ(トップコミュニティ、セカンドコミュニティ、サードコミュニティのいずれか)に「専門ゼミ」を挙げている人を半数確保

Yoshihiro Toyoda: リクルートワークス研究所 特任研究員

若手からシニアに至るまでのキャリア支援に研究者&実践者として携わるパラルワーカー。ライフシフト・ジャパン株式会社取締役CRO、産学協働人材育成コンソーシアム理事。著書に『実践！50歳からのライフシフト術』(共著/NHK出版)、『なぜ若手社員は「指示待ち」を選ぶのか?』(PHPビジネス新書)、『若手社員が育たない。』『就活エリートの迷走』(ちくま新書)、『新卒無業。一なぜ、彼らは就職しないのか?』(共著/東洋経済新報社)などがある。